

万博開幕まで 500 日と入場券前売り

11 月 30 日は大阪・関西万博開幕まで 500 日。その朝の朝日新聞 1 面左に、維新が提唱 重い「置き土産」と黒く囲ったタイトルが目についた。万博に関わる幹部官僚は「いつ誰が延期を言い出すか」とおびえる。閣僚のひとりには周囲に「準備は絶対に間に合わない。中止すべきだ」と漏らす。

同紙 24 面には、「くるぞ、万博。」と書かれ、何とも言えない大きなミャクミャクが掲載され、「前売が断然、お得」と前売チケットなどが並んでいる。前は「大阪・関西万博」と表記されていたと思うが、そんな文字は消えていた。下の方に小さく「来場にあたっては来場日時の予約が必要になります」と書かれている。前売チケットを手に入れても、それで入場できるわけでないのだ。はじめて知った。

毎日新聞 30 日朝刊「万博前売券 売れる？」に、万博入場券が詳しく書かれている。発売に合わせて入場券を買っても、入場日時を予約（3 回まで変更可）できるのは原則希望日の半年前からだ。開幕日に行きたい場合でも、24 年 10 月まで約 1 年待つ必要がある。パビリオンの観覧予約も複雑だ。申し込めるのは会場への入場 1 回につき最大 3 館まで。公式サイトで希望のパビリオンと入館時間帯を入力する。原則入場の 3 カ月前から申し込みを受け付けるが、人気パビリオンは抽選制で、抽選結果の発表は入場の 2 カ月前となる。次の予約は同 1 カ月前から受け付け、7 日前に発表。さらに入場 3 日前～前日に空きがあれば、追加で 1 館を先着順で予約できる。空き状況によっては当日、予約なしで入れるパビリオンもあるという。

また、24 年 10 月 6 日まで買える「超早割」（大人 6000 円）は早期購入の特典として、会期中の全日程からパビリオンが先行予約でき、最大 4 館の予約が可能だ。

こうした複雑なシステムになったのは、会場の人工島・夢洲への移動手段が限られているためだ。協会は 1 日当たり最大約 23 万人の入場を想定。主要ルートは、開幕に合わせて延伸する地下鉄と、大阪市内などの主要駅を発着するシャトルバスに設定している。輸送力に限りがあるため、シャトルバスも一部を除き予約制とし、混雑緩和を図る。

万博に行く気はないが、記事を読んで、その思いをさらに強くした。こんなに面倒で、ややこしい手続きを踏んで、万博に行く人がいるのだろうか。市役所 1 階の市民情報プラザで作業していると、いろんな質問をする人がやってくる。先日も老人が万博チケットをどうやって手に入れるのかと質問。早々とチケットを求める老人が現れたことに驚いた。チケットを「お得に」、買い求めたかったのだろう。老人はパソコンを利用しないという。チケットを購入しても、予約などできるのだろうか。

それよりも、万博が中止ないし延期になった場合の混乱ぶりが頭をよぎった。

(2023 年 12 月 2 日)